

当時ローマの教会には、肉を食べない、酒を飲まない、特別の日を重んじようという人たち、信仰の弱い人と見られていた少数の人たちがいました。他方、大多数の人は肉だとか酒にこだわらない自由な立場を採り、強い人たちと自称していました。パウロも自由の人でしたが、今日の箇所、教会の中でこの問題をどのように解決するかについて記しているのです。

13、15 節で「兄弟」とは弱い人たちのことです。勧告の相手は強い人たちです。パウロは、弱い人と強い人がこれまでは互いに相手を批判し、裁きあうことがあったとしても、これからはお互いに裁かないようにしようと、呼びかけているのです。パウロも、「それ自体、汚れているものなどは、神さまが造ったこの世界の一つとしてない。もしあるとすれば、それは心の中から出てくる。しかし、この食べ物は穢れていると思っている人のことも配慮しなさい。」と言うのです。パウロが懸念している「つまずきとなるもの」や「妨げとなるもの」とは、強い人が弱い人の見ている前で平気でお酒を飲むだけではなくて、実際に弱い人が無理をして食べたり飲んだりして苦しむということまで含んでいると思います。20 節で、「自分がつまずきを覚えながら食べる、そういうことはいけない」と言います。

そして、15 節以下に、その理由を記しています。

まず、15 節で、パウロは強い人に対して、兄弟を滅ぼすことになりかねないから、心配りをしなさい、と警告します。キリスト者として歩む弱い人を裁き、苦しめ、へと追いやることは、その原則において正しくとも、キリストに対して罪を犯すことなのです。なぜなら、キリストはこの弱い兄弟のために死んだからです。ここで、強い人の強さそのものが否定されるわけではなく、ただ強い人の自由が兄弟を苦しめることがあるのです。

次に、16 節です。「善いこと」とはキリスト者が得た何を飲食しても良いという自由を意味します。キリスト者の自由がそしりを受けるといようなことにならない心配りが必要なのです。

第三は、16~17 節です。神の国に生きることは、特定の食べ物や飲み物によってもたらされたり、妨げられたりするものではありません。キリストにあつて聖霊によって与えられる義と平和と喜びが、神の国のリアリティーそのものなのです。自分を喜ばせるのではなく神さまに喜ばれること、また、自分の義や自分の平安ではなく人々の信頼を得ることが、信仰者の基本的姿勢だと、パウロは言うのです。

19~20 節は結論です。論争と対立に導くようなことは一切避けて、教会の交わりと一致に役立つことだけを追求しよう、また、「互いの向上に役立つことを追い求めようではありませんか」と呼びかけるのです。